

序 靄然たる回顧の始点

遠来が轟いた。

にわかに強まった雨足に急かされるようにして、保科は目を開けた。鼻腔に流れ込んでくるのは夏の空気に違いない。

はて。今はもう冬だと思っただが。

保科は違和感を覚えたが、しかしよくよく考えてみると、どうして今は冬だと認識していたのか定かでない。

「夢でも見ていたかい」

籐椅子でゆつたりと文庫本を読んでいた木野崎が顔を上げる。

「ああ、どうもそうらしい。これが夢の続きでない」と定義するならばね」

保科は座のうえに胡坐をかき、頭も掻いた。意識をはっきりさせようというのだろう。しかし彼の知覚はもはや夢の世界の情報を参照することはなく、床板のほどよい凹凸や、雨どいから滴る水が砂や石を打つ音、そして保科の寝起きを観察する木野崎の微笑みを認識させ、異界との断絶を完璧なものとする。もう、どんな夢を見ていたのか、思い出せない。

「夢でもいいさ。おおいに結構。こうしてまた君とゆつくり話せるときが来るなんて、俺は夢にも思わなかった」「うん、同感だ」保科は卓袱台に置かれた水差しに手を伸ばし、中身の麦茶を、同じく卓袱台に用意されていた

ガラスのコップに注ぐ。「何年ぶりだろう?」

「それは、意味がある問いとは思えないな」

木野崎は微笑みを絶やすことなく保科を見つめている。

「同感だ」麦茶を一息に飲み干してから、保科は前の言葉を繰り返す。

ふたりは座敷に面した縁側にいる。卓袱台は座敷の端に引き寄せられ、脚のひとつが障子とぶつかっていた。

臨む庭には風流なことに紫陽花が植えてあり、それは雨に打たれながらも仄かな彩を提供している。竹垣があればなお趣があるだろうか、と保科はぼんやりと考える。

風鈴が、ちりんちりん、と鳴った。

保科は回顧する。まえにこの景色を眺めたのは、まだ小さな子供の時分だった。卓袱台は今よりもずっと大きく感じられた。当然だろう。ここを出てから、実にいろいろなことがあった。さまざまな人に出会った。

「最大の転機は……」

「西暦一九九九年八月」

「いや、僕が言いたいのは」保科は掌を見せて木野崎を制す。「僕個人、保科昇にとつての始まりだ。それはやはり、二〇〇六年の春だったと言えるだろうな」

「ふむ、神楽くんか」木野崎は手にしていた本に葉を挟み、籐椅子の手すりの脇に置いた。「元気にしているかな」

「君も会っていない？」

「永らく」

「それは彼女が幸福であることの証だね」

「同感だ」

木野崎が保料の言葉を借りた。

「もしも彼女に会わなければ、今ここで、君に見守られながら昼寝をしていることもなかっただろう。あの日之境に、僕は新たな世界に踏み込んだ。君のいる世界に」

「それは逆だ。君が踏み込んだ結果、今の俺が生じた。君は俺によって定義されたが、俺は君によって規定されるんだから」

木野崎が言つと、保料が笑った。

「それ、初めて聞かされたときには、全くチンプンカンプンだった」

「申し訳ない。巧い喩えが浮かばなくてね。まあ、どこのつまり、君にとつての始点が、この俺にとつては支点になつてゐるつてことだ」

「今はよく理解できるよ」

「だろつね。 当時は誰かさんにひどく心配されたが、いい按配に収まつたもんだ」

「ヒトにはそういう能力があるつてことさ。これは、僕の友人たちが証明してくれたことでもある」

「もちろん、俺もそれは知つてゐるさ。神蔵、バトウ、江藤、ライゼンベルガー、宇邨、深坂、夜宮、清胤……。数え上げればきりがなし、いずれも忘れえぬ、懐かし

い人々だ。しかし、今ではもう会える人間は数少ない」

「ずいぶんと時が流れた」

「ああ、本当に。そしてこれからも流れ続けることだろう。それもまた彼らのおかげだ」

「それは幸せなことだろうか」

「観測者次第。つまり、君や俺がどう思うかということだ」

「どう見るか。どう捉えるか……。まさしく宇邨先生のお言葉とおりだな」

「だろつ？」

堪えきれず、ふたりは声をあげて笑った。笑う客観的理由などなかったが。

雷鳴も雨音も、もう聞こえない。ふたりが庭に目をやると、竹垣に添つて植わつた紫陽花の葉と花びらとが、雨滴を宝石のように身に纏つてゐるのが見えた。

そう、彼らは観測者。この靄然夢苑の住人にして、私がかれから残そうとしてゐるすべての記録の情報源。

彼らの会話を聞く者はなく、彼らの姿を見る者はない。だから私は残しておくのだ。彼らの言葉を。思考を。感情を。その器に刻まれたあらゆる履歴を。漏らさず写し取つていこう。

言語という媒体に、正確な情報伝達を期待できないことは重々承知している。しかし、たとえ無為に思える手段に拠つても、可能性に託すしかないのだ。私にでき

ることはこれしかない。無限に円転する時空のなかで、
彼らの存在を夢幻とせぬために。

歴史に埋もれし人の記憶。私は、ただそれを明らかに
し、鏡のように映し出していこう。

鏡は自らを映さない。だから私は、これからの作業に
おいて自らの名を記述するつもりはない。

しかし、ここは始点であり終点。

アルファでありオメガ。

ゆえに、ただここにおいてのみ、私はその名を刻んで
おこう。

私の名は

。